報告　大学生の自然との親しみ方と環境問題への関心及び環境保全行動の関連について

石井　晶子*　川井　昂**　澤村　博**　青山　清英**　阿部　信博***　小山　裕三***
東海大学課程資格教育センター非常勤講師*　日本大学文理学部**　日本大学理工学部***

Relationship between the Degree of Interest in Environmental Problems and Environmental Preservation Activities Based on the Amount of Time University Students Spend in Nature

Akiko ISHII*　Takashi KAWAI**　Hiroshi SAWAMURA**　Kiyohide AOYAMA**
Nobuhiro ABE***　Yuzo KOYAMA***
Licensed Professional Training Center, Tokai University*　Nihon University** ***

(受理日2001年7月23日)

The objective of this study is to clarify the relationship between the amount of time spent by university students in nature and (1)the degree of crisis in life, (2)the degree of interest in environmental problems, (3)specific actions reflecting concern in their daily life and (4)participation in environmental preservation activities. The survey result are as follows.

1)Students who spend time in nature on a "daily basis" have a relatively high sense of crisis in life and high interest in environmental problems. As part of their daily life, these students act with consideration toward the environment, and participation in environmental preservation activities can be expected in the future.

2)Students who spend time in nature as a "special activity" have a low sense of environmental crisis and low interest in environmental problems. The ration of actions performed with consideration toward the environment is low, and their participation in environmental preservation activities is low as well.

To increase the awareness of environmental preservation it is important for schools to mainly provide programs that allow students to spend time in nature as part of their daily custom.

Key words:consideration toward the environment, crisis in life, environmental preservation activities, spend time in nature, university students

1　問題の所在と本稿の目的

現在は日常品にも「エコマーク」が使用されるものが多くなり、「地球にやさしい」というキャッチフレーズを掲げた商品が売られるようになってきた。企業自体も、環境に悪影響を与えない商品開発をすることで優良企業として社会的な評価を受ける時代である。またTVや新聞などのメディアでも環境問題の特集が組まれ、CMでも自然に配慮したメッセージ性のある映像が流されるようになってきた。このように毎日ごく当たり前の生活の中で、環境問題に関わるキーワードやトピッ

(問い合わせ先) 〒168-0064 杉並区永福3-24-10 2F

クに触れない日はないであろう。

自然保護・環境保全活動の必要性は、人間が営む社会環境を便利で効率的な社会にしていくことを追求してきた代償でもある。人間はありのままの自然を、人間社会の都合に併せて整備・開発し、人工的な自然に作り替えてきたのである。そしてその結果として、自然と人間の「共生」というライフスタイルを敢えて言葉として掲げなければならない状況が発生したのである。

環境問題を解決するための取り組みは、19世紀後半から始まった自然保護運動から始まる。海洋ジャーナリストであったレイチェル・カーソン(R. L. Carson)の著書「沈黙の春」は、環境保全・保護の古典と位置付けられ、自然界そのものの喪失だけでなく人間存在の危機に重大な警告を与えた。1972年にはストックホルムで環境問題に関する最初の国際的な会議である「国連人間環境会議」が開催された。「かけがえのない地球」(Only One Earth)をテーマにしたこの会議では、その成果として「人間環境宣言」が採択された。現在の環境破壊の進行について、第二のレイチェルと呼ばれるシーア・コルボーン(Theo Colborn)は著書「奪われし未来」の中で、環境ホルモンによる生殖異常・免疫機能の低下等、種の存続の危機にまで深刻化している現状を明らかにしている。

また環境問題の現状が明らかにされる過程で、環境教育への取り組みも重要となってきた。全地球的な立場からその問題を分析しているローマクラブは、第1レポート「成長の限界」の中で、「世界環境の量的限界と行き過ぎた成長による悲劇的結末」を認識することを訴えている。そして人類の危機に対して、その課題を解決するために第6レポート「限界なき学習」の中で、人々の学習能力を身につけることを強調している。その方法として現在の伝統的な学習形態の転換の必要性を提言をしている。将来起こるべき問題を鑑みると、過去に起こった問題を処理することで経験的に問題解決能力を習得する「現状維持型」の学習方法では、来るべき将来の課題に対して、危機的な状況に陥ちいてしまうという指摘である。ローマクラブでは、それに変わるものとして「革新型学習」を提言している。つまり起こるべき事態を予測し、シミュレーションし、シナリオ、モデルをたて、問題の回避や代替策を検討しようとする姿勢を学習していくものである。環境教育に関しては、特にこの革新型学習を取り入れることが必要とされるのである。

しかしその前提として、学校を中心にした環境教育のプログラム開発や革新型学習方法を導くためには、まず環境問題に対しての関心度を明らかにしなければならない。次代を担う大学生の環境問題に対する危機意識を把握することは、環境教育の方法や内容を構築するための基礎資料となると考える。現在の大学生は、バブル期という大量消費社会の中で成長してきた若者である。従ってまず大学生が生活の中で環境保全に対しての意識や行動をどの程度行っているかという点を明らかにすることは、研究を蓄積する上で重要な作業となるであろう。そこで本稿では、日常的に自然と親しんでいる者と、休日などを利用して親しんでいる者では、環境問題に対しての関心や環境に配慮した行動にどのような違いがあるのか。この点を明らかにすることを目的とする。

2　分析の視点

本稿では、自然の親しみ方や自然の捉え方に関しては、主観的な判断に基づくデータを用いた。主観的な判断を分析データとして用いたのは、自らのもつ自然観は、主観的な感性や感情の働きにより形成されるものであると考えたためである[1]。この点について既に呉(1998)は、自然観は「どのようなものにどのくらい自然らしさを感じるかという感性的側面」の影響をうけて形成されると検証している。つまり自然観は、客観的に存在する物の中に自然がどのように存在しているかを主観的な判断や感性で捉えることで形成されていくと捉えることができるからである。また木村(1998)は、風景は、視覚に媒介され、「情」と結びつき「風情」「情景」「景観」として個々人の中に意味を与えるとしている。ゆえに自然がどのようなものであるかという解釈には、客観的に存在する質的や量的なもので捉えるのではなく、主観的に意

味づけられている自然というというイメージに頼る手法をとることが有効なのである。

それでは次に環境問題に関する先行研究について、整理していく。

まず自然破壊や環境問題の意識に関して山田(1996)が、文科系・理科系の大学生の専門的な知識の有無と環境問題に関する意識と行動の差異を報告している。また榎本(1994)は、環境問題配慮行動について、身近な環境問題の対処法に関する知識度とその態度の関連性を明らかにしている。学校教育の中での環境教育のあり方について今村(1998)が、環境教育の教育学的な基礎づけは、「個別的な生活の問題であるとともに、総合的な社会システムの問題」であり、「新しい価値理念とシステムの構築」が必要であると提言している。そして川原(1998)らは、ベオグラード憲章で示された環境教育のガイドラインを受け、地球環境と地域環境の異質性を言及し、地球環境を地域環境へ還元することはできないとしている。そうであるならば身近な自然から影響を受けて形成される自然観は、地域環境に対する自然との関わり方や慈しみ、守り、共生する姿勢を育むことになると考えられる。しかし環境問題への意識をもたせるために、どのような行動を促すことが効果的であるかという点については、まだ充分に議論がなされているわけではない。

そこでこれまでの先行研究を踏まえて、主観的に判断した日常生活での自然の親しみ方の差異が、環境問題に対する意識や行動としてどのように現れるか検討していくことにする。本稿では、自然の親しみ方の差異と次の4項目との関連を明らかにしていく。その4項目は、①生命への危機感の程度、②環境問題への関心の度合い、③具体的に日常生活で気をつけている行動、④環境保全活動への参加状況についてである。これらの分析を通じて、物質的に豊かな日常生活の中で、環境保全のための行動をどのように啓発していくかという教育的課題を提示していく。

3　調査の方法

3.1　調査対象と時期

本調査で用いたデータは、1999年5月～6月にかけて、都内及び都内近郊にあるN大学の2年生以上の学生1032人に対して行った質問紙調査(自記式集合調査で実施し、一部自記式個別調査が含まれる)の結果である。

ここで大学生を調査対象としたのは、以下の理由による。大学生は、近い将来、日本社会を形成する一員となり、自らの判断でライフスタイルを決定していく時期にはいる。そこで物質的に豊かな社会で過ごしてきた大学生が、成育過程の経験を通して培われた自然環境に対する価値観や体験を探ることは意義があると判断したからである。

3.2　調査の枠組み

自然との親しみ方は、前述したように活動回数などにより客観的に測定できるものではない。つまり自然に対して「親近感」をもっているかどうかは、やはり「情」を媒介として個別的・主観的に判断されるものである。そこで本稿では、大学生の自然との親しみ方については主観的な判断に基づき、次のように2つのタイプに区分した。具体的なタイプは、主として自然との親しみ方を「日常的な活動」とする者、主として休日などを利用する「特別な活動」とする者、2つのグループとした。前者の「日常的な活動」は、自然を生活の一部として位置付けて、自然と人間の共生タイプと見ることができる。後者の休日などを利用した「特別な活動」として自然と親しむタイプは、自然との共生が「日常的な活動」としているグループより遠いものとして扱う。

4　結果及び考察

4.1　大学生の自然との親しみ方の特徴

被験者である大学生が、現在自然とどのように親しんでいるのかという特徴は、以下の通りである。自然との親しみ方を「日常的な活動」と回答した者は、41.6%(429人)であり、「特別な活動」であると答えた者は58.4%(603人)である。次節より、この2つの自然の親しみ方の差異性と、生命への危機感、環境問題への関心や環境に配慮ある行動、保全活動との関連を検討していく。

4．2　生命への危機感の程度

自然界のバランスが崩れることは、人間存在をも脅かすことである。環境ホルモンが身体に与える影響が問題視されるようになったが、環境破壊を身体的な危機として捉えているのであろうか。そこで大学生の自然との親しみ方の違いと、自分の生命への危機感の関連を明らかにしていく（表1）。

表1　自然の親しみ方と自分の生命への危機感

NA=3

		生命への危機感	
		危機感あり	危機感なし
自然の親しみ方	日常的活動 (N=428)	62.9%	37.1%
	特別な活動 (N=601)	51.1%	48.9%

いずれもp<.05

まず自然との親しみ方を「日常的」であるとしている学生で、自分の生命に対して危機感をもっている者は、62.9%である。自然との親しみ方が「特別な活動」としている学生で、自分の生命に対して危機感をもっている者は51.1%である。自然との親しみ方が「日常的」であるとしている者の方が、「特別な活動」としている者よりも、自分の生命に対しての危機感をもっている傾向にある。自然との親しみ方が「特別な活動」である学生は、自分の生命への危機意識が低いのである。つまり自然との親しみ方の違いが、自分の生命への危機感の程度にも影響を与えているといえる。

このことから解釈すると日常生活の一部として自然と親しむことは、生活の一部である自然が破壊されていることを身近な現象と捉え、それが身体へ及ぼす影響にも関心を向ける契機となるのではないか。一方自然との親しみ方を「特別な活動」としている者は、休日などを利用して自然環境を求めて足を運び、日常生活と切り離された場所と認識している。そのことにより自然がごく日常的に必要なものであるという実感と結びつきにくいのである。たとえ日常生活から離れた場所で自然破壊を目にしたとしても、それが自分の生命へ影響を及ぼすという実感にまでは至らないためだと考えられる。自然を特別なものとするのではなく、日常生活の中で親しむことが、自分の生存についても関心を向けることになるのである。そうであるならば、自然との親しみ方が、自分の生命以外の自然環境への関心、破壊される環境に対しての問題意識や、それを食い止める環境保全行動とも密接に関連している可能性がある。以下でこの点を考察していくことにする。

4．3　環境問題への関心の度合い

ここでは自然との親しみ方の違いと環境問題への関心度について検討していく（表2）。

表2で示す通り、自然との親しみ方が「日常的」で、環境問題に関心がある学生は84.0%となっている。自然との親しみ方を「特別な活動」としている者で、環境問題に関心がある者の割合は78.9%である。環境問題に対しては、自然との親しみ方が「日常的」である大学生の方が、自然との親しみ方が「特別な活動」としている者より、やや関心を向けている。

表2　自然の親しみ方と環境問題への関心

NA=10

		環境問題への関心	
		関心あり	関心なし
自然の親しみ方	日常的活動 (N=424)	84.0%	16.0%
	特別な活動 (N=598)	78.9%	21.1%

いずれもp<.05

この両グループの数値から、大学生の環境問題への関心は全体的に高い傾向にあるといえる。しかし日常的に自然と親しむことが、より環境問題へ関心を向けさせることと関係が深いと言えそうである。環境問題に対して関心を持つことは、環境保全のための具体的な行動へ導くためにの重要な前提となる。日常生活で自然と親しむ方法は、時間の使い方と関係がある。本調査の被験者である大学生は、比較的時間にはゆとりがある層でもある。この自由に使える時間を持つ時期に、日々の生活で自然と親しむことをライフスタイルとし

て習慣化させることも可能である。その方向付けをすることは、大学教育の役割の一つと考える。この学生時代の習慣化は、将来世帯を所有する時のライフスタイルの基盤となると予測される。

4.4 具体的に日常生活で気をつけている行動

次に自然との親しみ方の違いと環境に配慮した具体的な行動について検討していく(表3－1～表3－4)。環境に配慮した行動は、日常生活での環境保全活動の一端とみることができる。本節では具体的な行動例として、比較的大学生全般が行動しやすいであろう次の4項目を取り上げた。①無農薬野菜の購入、②ペットボトルのリサイクル回収、③アルミ缶のリサイクル回収、④リサイクル商品の購入の4点を取り上げた。

表3－1から、自然との親しみ方が「日常的」である学生で無農薬野菜を購入する割合は、29.7%で、自然との親しみ方が「特別な活動」である者は17.7%である。自然との親しみ方が「日常的」である者の方が、「特別な活動」としている者より、無農薬野菜を購入する傾向にある。

表3-1 自然の親しみ方と無農薬野菜の購入 NA＝5

		無農薬野菜の購入	
		購入する	購入しない
自然の親しみ方	日常的活動 (N=427)	29.7%	70.3%
	特別な活動 (N=600)	17.7%	82.3%

いずれもp<.05

野菜類は、日常生活の中で必ず口にする食材である。農薬の開発や品種改良は、生産者にとっては効率よく栽培する助けとなっていることは事実である。しかし農薬の脅威は、土壌・水質・大気汚染をもたらし、さらに生態系のバランスを崩すだけでなく、人間の身体も脅かすのである。今後消費者教育の中で、無農薬野菜の購入など環境に配慮ある消費者行動を促すための選択意識を高めていくことが課題といえる。

次に表3－2・表3－3では資源ゴミの回収に対しての行動を検討した。スーパーマーケットなどでは、リサイクル箱を設置する店舗もみられるようになり、日常生活でもリサイクルや分別回収に対して意識させられる機会は増えている。資源ゴミの中でも特にペットボトルやアルミ缶は、大学生にとって飲料水などを中心として日常的に使用されるものであり、これらのリサイクル箱への回収協力を検討した。

表3-2 自然の親しみ方とペットボトルのリサイクル回収 NA＝6

		ペットボトルの回収	
		回収する	回収しない
自然の親しみ方	日常的活動 (N=426)	59.2%	40.8%
	特別な活動 (N=600)	46.2%	53.8%

いずれもp<.05

表3-3 自然の親しみ方とアルミ缶のリサイクル回収 NA＝8

		アルミ缶の回収	
		回収する	回収しない
自然の親しみ方	日常的活動 (N=425)	56.5%	43.5%
	特別な活動 (N=599)	43.4%	56.6%

いずれもp<.05

まず表3－2から、自然との親しみ方が「日常的」で回収箱へペットボトルを回収するようにしているという学生は59.2%で、自然との親しみ方が「特別」で回収箱へ回収している者は46.2%である。ペットボトルのリサイクル箱への回収協力に関しては、自然との親しみ方が「日常的」である者の方が、「特別な活動」としている学生より回収に心がけているといえる。

そして表3－3にみるアルミ缶のリサイクル箱への回収協力は、「日常的」に自然と親しむ者で回収をしているのは56.5%で、自然との親しみ方を「特別な活動」とする学生で回収をしている者は43.4%となっている。アルミ缶の回収箱への回収協力についても、「日常的」に自然と親しむようにしている学生の方が、「特別な活動」としている者より高い割合で行っている。

このことから日常生活の範囲で可能であるリサ

イクル箱への回収協力については、自然を身近に感じて触れ合っている学生の方が、より積極的に行っているのである。ペットボトルなどの回収場所は、資源ゴミ回収やスーパーマーケットなど日常生活で協力しやすい場所も増加し、回収率アップに効果をあげている。しかし大学生だけでなく一般社会人のライフスタイルも多様化しており、自治体の指定日だけでは協力が困難な状況もさらに増加すると予測される。そのために多様なライフスタイルに対応するために、分別に協力できる機会が、コンビニエンスストアーのように24時間対応する場所など、様々な場所に設けられることも、今後の検討課題となるであろう。

この回収されたペットボトルやアルミ缶などでリサイクルされた消費財は、リサイクル商品として店頭に戻ってくる。そこで次に自然との親しい方の差異と、リサイクル商品購入との関連を検討した(表3－4)。

表3-4　自然の親しみ方とリサイクル商品の購入

NA＝8

		リサイクル商品の購入	
		購入する	購入しない
自然の親しみ方	日常的活動 (N=426)	49.3%	50.7%
	特別な活動 (N=598)	38.0%	62.0%

いずれも$p<.05$

自然と「日常的」に親しんでいる者でリサイクル商品を購入している者は49.3%、自然との親しみ方を「特別な活動」としている学生は、38.0%である。自然と「日常的」に親しんでいる学生の方が、「特別な活動」である者よりリサイクル商品を購入している傾向にある。ここでも自然との親しみ方の違いが、リサイクル商品購入に影響をあたえる結果を得た。

ここで「購入する」という行動から、前述した無農薬野菜の購入とリサイクル商品購入について比較してみると、無農薬野菜の購入より、リサイクル商品の購入の方がより積極的に行われているといえる。この点に関して学生のライフスタイルを考慮すると、無農薬野菜という食材の購入より、リサイクル商品を購入する機会の方がより身近な行動にあると考えられる。そうであるならば現在大学生という立場で、無農薬野菜に対しての購買行動が消極的であっても、将来的に無農薬野菜の購入に対しても積極的になることが期待できる。つまり日常生活の中で自然を必要なものとして位置づけている学生は、無農薬野菜やリサイクル商品など環境に配慮した商品選択を行う消費者となり、いかに自然と共生していくかということを「生活の質」の向上としていくと推測される。

4．5　環境保全活動への参加状況

前述したように自然との親しみ方の違いは、環境問題への関心度や日常生活範囲での個人的な行動にも影響を与えていることがわかった。そうであるならば自然との親しみ方の違いは、組織的な環境保全活動や自然保護活動への参加と関連があると推測される。そこで本節では、まず自然の親しみ方と、環境保全活動への参加経験を検討した(表4－1)。

表4-1　自然の親しみ方と環境保全活動への参加

NA＝15

		保全活動への参加経験	
		経験ある	経験ない
自然の親しみ方	日常的活動 (N=424)	20.4%	79.6%
	特別な活動 (N=598)	12.9%	87.1%

いずれも$p<.05$

自然との親しみ方が「日常的」で環境保全活動の経験がある者は20.4%、自然との親しみ方が「特別」な者で活動参加経験があるのは12.9%となっている。自然との親しみ方が「日常的」である学生の方が、「特別」である者より環境保全活動に参加経験をもっている傾向にある。

このように自然との親しみ方の違いは、環境保全活動への参加経験にも違いとして現れている。自然を身近に感じて親しむようにしている学生は、日常生活の範囲で個別的な配慮をするだけでなく、より組織的な環境保全や自然保護活動にも参加する傾向にある。

表4-2　自然の親しみ方と環境保全活動への不参加理由

		不参加理由							
		興味ない	暇がない	意味がない	情報がない	強制的な感じ	偽善的	恥ずかしい	その他
自然の親しみ方	日常的活動 (N=329)	11.2%	36.5%	2.1%	30.1%	3.0%	9.7%	1.5%	5.8%
	特別な活動 (N=510)	25.1%	28.6%	2.5%	23.7%	4.5%	9.2%	2.9%	3.1%

いずれもp<.05

現在自然保護や環境保全を図るための市民運動やNPO等の活動が盛んになってきた。しかし表4－1の大学生の環境保全活動への参加状況をみると、決して活発に参加しているとは言えない。それではこれまで環境保全活動に参加をしなかった学生がどのような理由で参加しなかったかという点をみていくことにする(表4－2)。

まず不参加理由を整理してみる。「暇がない」「情報がない」という理由は、物理的な障害があるために参加しなかったグループとみることができる。そして「興味がない」「意味がない」「強制的な感じ」「偽善的」「恥ずかしい」などの理由は、物理的な理由ではなく、活動に対しての必要性を強く感じず、体裁など自分の感情を優先しているグループである。

次に自然との親しみ方の違いと不参加理由の傾向をみていくことにする。保全活動の不参加理由を物理的な障害である「暇がない」としているのは、自然との親しみが「日常的」な学生は36.5%、「特別な活動」である者は28.8%である。ここでは自然との親しみが「日常的」である者の方が、「特別な活動」である者より物理的な理由で参加しなかったといえる。そして「情報がない」というグループでは、自然との親しみが「日常的」な者の割合は30.1%、「特別な活動」とする者の割合は23.7%となっている。このグループも自然との親しみが「日常的」である学生の方が、「特別な活動」としている者よりも高い割合で物理的障害を不参加理由としてあげている。しかし環境保全活動そのものに積極的な意味を見出していない「興味がない」という理由から参加しなかったという学生のうち、自然の親しみが「日常的」であるとする回答者は11.2%、「特別な活動」であるとしている学生は25.1%である。環境保全に対しては自然との親しみ方を「特別な活動」である者の方が、自然と「日常的」に親しんでいる者より、興味を持っていないといえる。また「強制的な感じ」「恥ずかしい」というグループも「興味がない」と同様に、自然との親しみ方を「特別な活動」としている学生が理由としてあげる割合が高い。

表4-3　自然の親しみ方と今後の環境保全活動への参加　NA＝15

		今後の保全活動への参加	
		参加する	参加しない
自然の親しみ方	日常的活動 (N=426)	54.0%	46.0%
	特別な活動 (N=594)	42.3%	57.7%

いずれもp<.05

これらの特徴から、次のようなことが言える。「暇がない」「情報がない」という物理的障害を理由として、環境保全活動に参加できなかったとするグループは、環境保全活動への関心や意思は持っているのである。これらのグループは、自然と「日常的」に親しんでいる学生に多いことから、自然と日常的に親しむことが保全活動へ誘導する要因となると言える。そして被験者が大学生であることから、「情報がない」という物理的問題の解消については、大学が環境保全活動についての情報収集や告知に努めなければならないであろう。また「暇がない」という理由も、その解消として大学の授業に組み込むなども可能性として考えられる。

一方「興味がない」「強制的な感じ」「意味がな

い」「恥ずかしい」という理由のグループは、保全しなければならない現況や意義を啓発していくことが必要な学生層である。これらを理由としているグループの特徴は、自然を「特別な活動」としている学生の方が、「日常的」に親しんでいる学生よりやや多い傾向にある。これらのグループに対して保全への関心や意識を高めていくためには、日常生活の中に自然と親しむライフスタイルを習慣化していくことも必要である。これらのプログラムを大学の授業の中で、提供されることが求められる。

それでは、今後環境保全活動の参加機会があれば、参加する意志があるかどうかについてみてみる(表4－3)。自然との親しみ方が「日常的」である者で今後の保全活動への参加意志をもっている者は54.0%で、「特別な活動」である者は42.3%である。やはり自然との親しみ方が「日常的」である者の方に、「特別な活動」である者より、今後積極的に保全活動に参加しようとする意志がみられる。表4－1の「日常的」に自然と親しんでいる学生の過去の参加経験者の割合と比較してみていくと、不参加理由として高い割合を占める物理的障害を取り除くことで、参加学生を増加させることができるのである。

環境保全活動は、活動内容として自然環境の中で行うものが多く、日頃から自然に親しむ習慣を持っていれば、その活動も特別なものではなく、日常生活の一部として捉えられるのである。環境教育で、環境の保護や改善に積極的に参加する意欲を促すためには、まず自然と日常的に親しむことから始め、自然に対しての関心や感受性を身につけていくことが環境に対する責任感や使命感を育てることとなるのである。

5　おわりに

本稿では、自然との親しみ方を「日常的」としている者と、「特別な活動」としている学生では、自分の生命への危機意識や環境問題への関心、環境に配慮した行動、保全活動への参加状況に影響を与えるという結果を得た。人間は五感を通して自然に触れ、五感を通して自然を実感する。しかし自然を「特別な場所」で「特別な時間」を過ごすこととしてしまうと、自然と共生していくという意識づけにまでには至らないのである。その結果、環境問題を、人間社会の維持・発展のためだけという限定的な問題として捉えてしまうことになるのである。

またライフスタイルの中で、日常的に自然と親しむ機会を増やすとともに、「生活の質」の価値転換も必要となるであろう。これまで「生活の質」の指標は、物質的な豊かさや、多くの物質的消費財を所有することにあったが、自然と共生するライフスタイルを「生活の質」の指標としていかなければならない。そうすることで一人一人が日常生活の中で環境に配慮ある行動を取るようになり、組織的な自然保護・環境保全への参加も高まるであろう。

このように「生活の質」の転換、自然との共生についての啓発は、環境教育の役割である。まず環境教育では、環境に配慮ある行動を促すためには、日常的に自然と触れ合う直接体験の機会を取りこむことが重要といえる。学校教育や社会教育機関では、自然体験を特別な行事として特別な場所へ行くだけでなく、平常の授業や講習の中で、自然と関わる方法や、自然と親しむことが習慣化されるプログラムの提供が必要である。さらに自然と日常的に親しむことから導かれた環境問題に取り組む姿勢へ発展させていく段階的プログラムを展開させていくことが求められる。そうすれば環境破壊を予防し、将来を予測し、解決していくための「革新型学習」に発展させることができ、環境状況の評価能力や問題解決の技能を習得していくことができるのである。今後学校や地域のなかで、日常的に自然と接する機会や方法、将来を予測した生活のあり方について議論されなければならないであろう。

注

1) 自然観や子どもの空間認知の形成に関しては、奥野(1972)、呉(1998)、木村(1998)、寺本(1988)らにより、多様な実証を用いて幼少期の成育環境や体験が大きな要因となっていることが検証

されている。

引用文献

今村光章, 1998, 学校における環境教育の教育学的基礎づけを求めて, 環境教育, 8(1), 11-22.

榎本博明, 1994, 環境情報としての実践的対処知識の重要性について, 環境教育, 3(2), 62-67

奥野健男, 1972, 文学における原風景：原っぱ・洞窟の幻想, 集英社.

川原庸照, 萩原秀紀, 川崎謙, 高知大学教育学部, 岡山の自然を守る会, 1998, 環境教育における地域環境と地域環境, 環境教育, 8(1), 2-10.

木村博, 1998, 風景の現象的位相：環境教育への一視覚, 国際教育研究, 18, 26-40.

呉宣児・無藤隆, 1998, 自然観と自然体験が環境価値観に及ぼす影響, 環境教育, 7(2), 2-13.

佐島群巳, 1998, 環境マインドを育てる環境教育, 教育出版.

佐島群巳, 1995, 感性と認識を育てる環境教育, 62-63, 教育出版.

沢田允茂, 1975, 認識の風景, pp. 201, 岩波書店.

下村彰男, 1994, 日常的レジャー・レクリエーション環境の課題, レジャー・レクリエーション研究, 27, 42-48.

寺本潔, 1988, 子ども世界の地図：秘密基地, 子ども道, お化け屋敷の織りなす空間, 110-138, 黎明書房.

寺本潔, 1994, 子どもの知覚環境, 15-48, 地人書房.

ボトキン. J. W. 他, 大来佐武郎監訳, 市川昭午訳, 1980, 限界なき学習：ローマクラブ第6レポート, 38-71, ダイヤモンド社.

メドウズD. L., 大来佐武郎監訳, 1972, 成長の限界：ローマクラブ「人類の危機」レポート, pp. 178, ダイヤモンド社.

山田一裕, 1996, 大学生の環境問題に対する意識と環境にやさしい行動, 環境教育, 6(1), 49-56.